

木下杢太郎日記

第三卷

木下幸太郎日記 第三卷

第三回配本(全五卷)

一九八〇年三月三十一日 発行

定価三〇〇〇円

著 者 太 田 正 雄

発行者 緑 川 亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋二五五
発行所 株式会社 岩 波 書 店

電話 〇三二六五二四二一
振替 東京六二六二四〇

印刷・三陽社 製本・牧製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

目次

〔名古屋日記〕	三
〔大正十五年日記〕	二
昭和貳年	五
昭和參年	七
〔昭和四年〕	七
昭和五年	一〇
Journal de Pontan 1927-1930	一七
シヤム紀行日録	一六
昭和六年	一八
昭和七年	一九
昭和八年	二三

昭和九年	二九三
昭和十年	三七五
後記	四四七

日

記

三

大正十三年—昭和十年

〔名古屋日記〕

Mémoires Décembre 1924—

十一月廿二—三日

ツヅミノ鳥屋ニ遊ビニユクトイフコトデ今日午後から中津川にゆく。これには予の仲間入の歡迎會も含まる。

千種の驛からのる。三時廿七分かの發。人名は田村・齋藤・酒井・吉川(婦人科)。中島(眼科)。川石(外科助手)。 ^{〔空白〕}(外科)。林亥之助(Pharma.)。

二時間半かゝる。同室に一客有り。酒をすすむ。あとにてきくと土木の技師なりし由。宿に着くと連が來てゐる。

入浴。

酒宴。踊。家の Geisha は公休日なりし由、數人來、おかみさん(おいゝ?さん)。

酒井谷平(舎兄の長唄友達)も來る。Portugais の如き physiognomie を有す。口甚だ大きな人なり。翌日は八時におき、飯も食はず、鳥屋の主人自身の案内にてゆく。

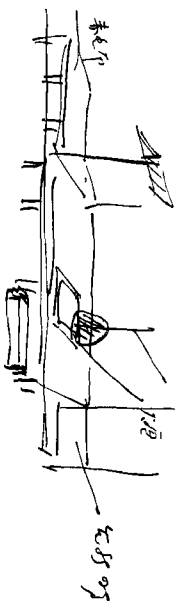
この町は山にてかこまれ、山の遠景は伊太利を思はす。又家並は京都の如し。

——Hh a—h Cyrene. etc

とやは景色のよき丘陵の山にあり。笹、灌木、その間に絹絲にて造れる細き目の網を(かすみあみ?)を張りてあり。幾重にも張る。

おどり。雀、かしら等。

„菊頂き“といふ鳥かゝりて動かさなつてゐる。



かくの如き構造の簡單なる家也。

〔欄外〕 見晴しのよい別荘、鬼ごつこ。

酒井谷平の兄。(足袋製造業。福澤桃介以前に木曾川の水の株を買ひ置き利す。戦時九州に織業を始め、つひに失敗。今むしろ借財ありといふ。)

砲兵少尉までつとめた人。ある會社の監督役の如き人も長大、踊いる〜巧み。社長さん社長さんと呼ぶる。昨夕の(今日もある)いち番 aimée ノ Geicha の Ami なり。この人今夕の食事の時には

大に酩酊してあったり。口より白きよだれを畳の上に垂す。
酒井谷平 その他人々。

梅花亭といふ宿のうち藝者大勢。

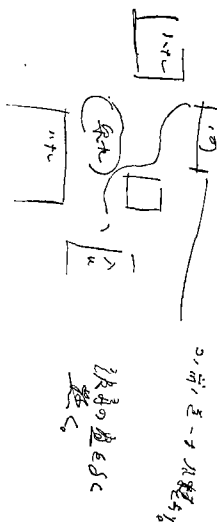
この山のうしろにて青山熊通生れたりといふ。

それから木曾川の城山(?)とかいふ山の下の所までゆく。

この邊の景色杭州の向岸のお寺のある所などを思ひ出させる。

花崗石の大岩の縁を流れる水。

motorboat 走らす。又梅花亭にかへり、夕めし食ひ(料理美ならず。醤油の代りに [空 白] を用ゐる)
それから七時廿幾分かの汽車でかへる。その前夜藝者屋で八人斬ありし噂。



久しぶりの徒歩故膝の所ややいたく、脚も大につかれたり。

帰宅. la porte était fermée. couché avec elle sans faire l'amour.

十一月廿四日 月

九時出院。

外來患者多く、一時半まで診察にかゝる。

Radium の angiuma complex の Therapie の Dosierung について疑問起る。

それから Weißer Zungenbelag の Manen-untersuchung のつづき、この種のもの、何れも Mycelblastoma (Montier) Albicans (?) の Natur なること略確定す。

五時半帰宅。

今日はぼるつがる記を書く積のところ、Brocq の Précis-Atlas de pratique dermatologique をよみつひに外れる。Eczema の Bad-therapie について考ふ。8 $\frac{1}{2}$ まで正一と遊び、又畫をかいてやる。Zeichnung に對して 特別の Neigung あるやに見ゆ。

下痢ノ水瀉。

Elle est encore malade (enrhumée) et a couché déjà de 9 heure.

十二月^[空白]□日 土

乗馬にゆく約束のところ、倉橋氏の玩具の會今日ありし故やめる。

午前中は bibliothèque の片付にて終る(病院)

倉橋氏より迎のもの來、ゆく。九里四郎、馬場孤蝶、後に一緒になりし久留島^[空白]□彦。

おもちやはつまらぬものなりき。

晩壽といふ處にて會食。

陳列所長原氏は、面白き Tokiomen

西園寺(銀行)の(雀)鳥さしの話。

1) 板橋は雀の屈強なる狩場。嫖客と女郎と雀をさしうるか否かのかけ。女郎曰く私三度南むあみ陀佛といへば雀助かる。いへども雀捕らる。客十錢銀貨を放る。老車夫來(Tchan totté okyné)

2) 四時半比男又通る。そこに雀をさしあたるは彼也。又來り、お前鳥をさすといふが今日はよくさす男が留守。お前には到底あんなにはゆくまい。

3) つぐみは浦鹽の方より能登^{カヌヘ}のほうたつ山を見かけて来る。それまで腹をへらし身を輕くす。ほうたつ山にて始めて食ふ。ぐみなり居る所なり。それから中津川の方まで來たるならむ。

4) 天狗と爭ひたる侍の話。

5) くひなを異にてとる話。

霰小紋の羽織に小紋の袴。くひなの笛、竹にて作る。

十二月七日 日

終日片付ごと。

Anatole France の Révolte des anges を¹/₄よむ。Madame Saito 來訪。

十二月八日 月



十二月十日

Il faisait très froid ce soir.

11 Dec. 1924

Le beau frère est arrivé, je pars à Tokio.

[大正 14 年]

le 8 I 1925

午前十時-20 外國語學校. 武内大三郎氏に偶然あふ. それから笠井氏にあひ用談.
行啓にあふ.

小宮君を訪ふ. 中食

齋藤茂吉.

農科大學, 皆不在.
やぶそば.

醫局にゆき雑誌をうつす。

颯田不在。

與謝野氏を訪ふ。座に松下大三郎氏ある。□□の件。

le 9 I 1925

朝岩波ノ番頭來。

(幸田氏

中村屋のおばけ。

目力齒力

雁鍋の白犬(雁四郎)

福助

雨が降るから八百膳はきんこ(?)だらう。

鈴…?

le 10

1. Sevilla の文科大学の圖書館。夏午刻暑し。何か頭がカン〜……としてゐる。丁度夢み入る時の頭のやうに 外に時々車のきしり。

戀人の館員

夢想曲(又は他の音曲入ること)

rêve 柳の夕 窓から海……舟来る la deuxième concubine……et un jeune Samourai……

Baisse de la rivière

une femme…… “夜” Soeul Solento 白髪のこと

la rêve à la bibl……

彼の仕草也といふ.

le 25 I (Dimanche) 25

Méditation

○Ça n'est pas de témoin qu'on l'aime. S'il l'aime, il tolérera avec de Sympathie sa faible……

○Mais c'est plutôt l'égoïsme. Je sens d'abord que sa “dignité” a été blessée. Et puis le sentiment de Haine peut être causé par l'impulsion de sexe que est empêché.

○Ce n'est pas parce qu'on été forcé, mais c'est plutôt sa propre volonté.

○Man spielt instinktmäßig die Rolle des Fuchs.

○le rôle de Métsuké.

le 27

○Shosō kara Haine no Kangio e no utsuriyuki.

○Dai Sansha ni taixite okoripoknarkoto.

Ce n'est pas de regret qu'on sent qu'il n'est pas aimé, mais c'est la peine de savoir qu'il n'est pas être

regarder important.

楠太——Filme の製作の下相談

——蜂谷氏を夜尋ね、不在

le 2 Févr.

○Kakunogotoku cocoro ga fanaré banaret ni natte oua, icho ni iatocorode Kōrae chōganai.

○Par sa lettre je pouvais deviner le sentiment de rébellion.

○Si je pouvais j'avais crié !

Après avoir regarder des devins^(マヤ), j'ai été bien calme. Terrible est la vie !

○日本人が馬又は家畜を慣らすが如し。之を溫和にせずして頑にす。

○Tokio ni aranu koto ga grand handycap^(マヤ) 也。

○Pläne u. Quälerei.

○Theoretische Trotzigkeit und physische Symptome in der Gegenwart

○Abgespannt. Wiederkehr nach Theorie

二月二十八日 土曜日 猿庵茶會處

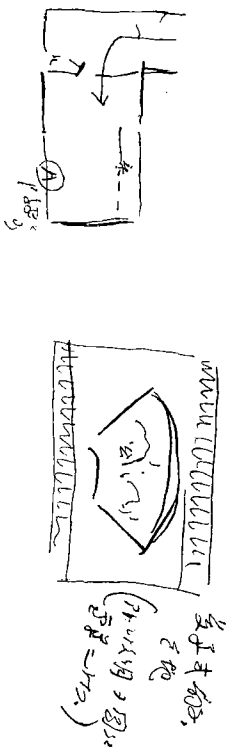
正午—10'頃庫ニテユク。宗田□助ノ名札ノアル店ニユクニ男一人アリ。ソノ分ナラバ案内人。ソノ男ノ草履途中ニテ切レル」俵屋氣ノキカヌコト。

隣ノ木戸ニ猿庵ノ標札アリ。

マダ閉門ノ時ノ如キ門前ノ様、閉マリテ居ルガ、下男、マダ門ヲ明ケトキヤセシデシタトイフ、予、念爲メ今日茶會アルヤヲ聞カシム、トウソノ聲、入口ニ外套ヲスグ。

入ル。マダ誰モ來テ居ヌ

座ニハ印度風ノ紅キ切敷キテアル。



“手前ハー？—ノ店ノ者デス”トアイサツシタ茶坊主風ノ若者來リ、寒サノアイサツシ、手アフリヲ置イテユク、

田村、齋藤來ル。ソノアト(順序忘ル、八木澤、藤井、酒井)

膝イタキコト限ナシ(蒲團ナシ——後ニキケバ、ココハ客ダケノ勝手ノ扣室也トイフ)。